



しびき



CONTENTS

- 1 平成27年賀詞交歓会
- 4 識者による講演会 中原英臣氏
- 5 新社長登壇・新邦工業(株)／金子賢三氏
- 6 技術委員会 インド視察レポート
- 8 平成26年 暦年出荷実績



平成27年

賀詞交歓会



ドラム缶工業会 小野 定男 理事長

理事長挨拶 工業会活動計画について

ドラム缶工業会の賀詞交歓会が1月9日(金)午後5時30分から、鉄鋼会館(東京都中央区)で開催されました。冒頭、挨拶に立った小野定男理事長は、本年の課題や活動について下記のように述べました。

皆様、新年明けましておめでとうございます。本日は大変ご多忙にもかかわらず、経済産業省 山下鉄鋼課長様をはじめ、多くの皆様のご出席を賜り、誠にありがとうございます。新年にあたり、一言ご挨拶させていただきます。

昨年を振り返りますと、日本経済は金融の異次元緩和や財政出動効果により好調なスタートを切りました。しかし、4月の消費税増税後、個人消費が想定以上に冷え込み、新缶ドラム需要と強い相関関係があるとされる鋳工業生産指数は一進一退の状況となっています。

新缶ドラム、ペール缶の全国出荷量は一昨年の9月より11カ月連続して前年同月を上回りましたが、昨年8月には一転しマイナスとなりました。下期に入っても対前年では、プラスマイナスが交錯し、足踏み状態が続いております。

今年は、昨秋の追加緩和や消費税増税の延期に加えて、原油価格の大幅な下落などの材料に支えられ、再び景気回復の好循環に拍車がかかることを願っております。なお、石油業界や化学業界では、国内生産拠点の集約や閉鎖、再編などの計画が伝えられており、ドラム缶、ペール缶需要への影響を慎重に見極めながら、その動向をよく注視してまいりたいと思います。我が国のドラム缶、ペール缶の競争力は高い技術力と品質、デリバリーの確かさに支えられていることはいまでもありません。そして、安全で環境優等生の産業用容器として環境に優しい社会の実現に貢献するという基本認識から、ドラム缶工業会では、製造や物流にかかわる総合的な技術力の向上や、各種の安全・環境対策技術の向上を活動の柱として、国内外の情報収集と会員各社への発信を強化してまいります。

昨年の活動を振り返りますと、技術委員会が中心となって標準色の見直しを行い、VOC削減に積極的に取り組むとともに、ドラム缶関連のJISを、市場実態や最近の技術動向に合わせ、最適な技術内容とすべく2015年度のJIS改訂に向けた取り組みを進めてまいりました。また、技術論文発表会や工場見学会を通じて会員各社の技術力向上にも取り組んでおります。UN危険物部会の対応として、気密試験方

法見直しにかかわる検討を行ったほか、パール缶については、お客様の利便性を図り、社内教育にも役立てるために、取り扱い上の注意および用語集の見直しを行いました。一方、国際活動として当工業会の提案により国際鋼製ドラム製造業者連合会(ICDM)の組織内に、新たに技術委員会の設置が決められました。また、2016年に第9回のアジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会(AOSD)国際技術会議をインドで開催することが決定していますが、昨年末、その準備のため技術委員会のミッションをインドに派遣し、現地の工業会や関係先を訪問いたしました。企画・統計委員会では、かねてより改善の要望が出ていた工業会のホームページの改訂作業に着手いたしました。

今年の課題としては、引き続き技術を中心とした活動を推進してまいります。標準色の見直しとJISの改訂は2015年度が実行の年になります。また、技術論文発表会の拡充や、パール委員会が検討している自動化技術の研究などを通じて、引き続き総合的技術力の向上に取り組んでまいります。

国際活動では、昨年発足したICDM技術委員会が、9月に全体研究会合を開催します。今後これをプラットフォームとしてUN危険物対応を含む国際的な規格や基準の見直し、環境対応技術の向上などについて、国際的な連携を強化してまいります。また、2016年のAOSD国際技術会議開催に向けて、テーマ設定やプレゼンスキームの検討、会議の運営要領など、本会議の成功に向けた支援活動を実施してまいります。今年6月に更生ドラムの国際団体が国際会議を開催しますが、当工業会からもミッションを派遣する予定です。

また、ドラム缶工業会の活動を社会に広くアピールしていくことも大切です。現在、進めているホームページの改訂を通して、技術・統計情報を中心に、工業会として情報発信を行う仕組みを構築いたします。

安全について一言申し上げますと、直近3年間は労働災害件数が漸減傾向にあり、各社の真剣な取り組みが成果として現れているのではないかと感じています。工業会では2006年から、会員各社の災害事例の共有化を通じて、類似災害の撲滅活動を続けておりますが、加えて現在、技術委員会にて会員各社より報告をいただいた災害事例の傾向分析を行っています。災害の種類やどのような状況で発生したか、被災者の年齢や経験年数など多角的に分析し、災害発生防止に活用できるデータベースを構築してまいります。

会員各社におかれましても、引き続き「完全無災害の達成」に向けて、さらに知恵を絞り、真摯に徹底した取り組みをお願いします。

このような工業会活動の健全な推進のため、工業会では「競争法コンプライアンス規程」を制定しております。昨年6月には独占禁止法の専門弁護士を招いてコンプライアンス研修を開催し、コンプライアンス意識の徹底を図りました。工業会活動の健全な発展のためには、会員各社のコンプライアンスに対する責任ある認識が必要です。工業会では、これからも様々な形で情報発信を行ってまいりたいと考えております。皆様のご理解とご協力、積極的なご参加をお願いいたします。

最後となりましたが、本年がご列席の皆様および、ご家族の皆様、そして当工業会にとって実り多い一年となることを祈念し、新年のご挨拶といたします。





経済産業省製造産業局鉄鋼課 山下 隆也 課長



ドラム缶工業会 野上 正道 副理事長



ドラム缶工業会 山本 和男 副理事長

引き続き来賓を代表して、経済産業省製造産業局鉄鋼課の山下隆也課長より、祝辞をいただきました。

新年明けましておめでとうございます。

2014年7月に着任して早くも半年が過ぎました。この間、業界環境が厳しくなってきましたが、2015年は最後に振り返った際、良かったなと思える年にしていきたいと思えます。

安倍政権発足2年目で、成長戦略に関しては3本目の矢として取り組んでおりますが、昨年の末に重要な決定事項が二つありました。一つは、平成27年法人税率の2.51%引き下げ、二つ目は、3.5兆円の緊急経済対策です。鉄鋼業界に関連します点では、平成26年度の補正予算で省エネ補助金として930億円を決定しました。補助率は三分の一から二分の一へ優遇され、中小企業は二分の一に引き上げますので是非、ご活用していただきたい次第です。ものづくり補助金の補正予算は約1,000億円です。工場などのさらなるコスト削減にもご尽力いただきながら、試作費などの事業費に役立てられますと、競争力強化にもつながるかと思えます。また、皆様の業績が上がりましたなら賃上げもご検討いただきますと、アベノミクスの下、消費の増大により物がよく売れ、経済の好循環も望めます。

私も全力を尽くして皆様と一緒に取り組んでまいりますので、よろしく願いいたします。

来賓祝辞を受けて、野上正道副理事長（ジャパンペール社長）が乾杯の音頭をとりました。昨年はペール缶業界もドラム缶業界も販売は、日本経済の動向に大きく連動した

1年でした。ドラム缶工業界の統計によりますと、昨年1月～6月のペール缶販売は前年同期比でプラスでしたが、12月の数値はまだ出ていないものの、7月～11月は前年同期比でマイナスという厳しい結果となりました。ただ傾向的には、月を追うにつれて回復しているようにも感じております。今年は是非、景気回復が実感できる一年になって欲しいと願っているところでございます。

昨年のペール委員会の活動は、何よりも「安全第一」という目標を掲げ、大きな労働災害が発生しなかったことは非常に良かったと思っております。

平成27年に関しましても、「安全第一」を最優先に掲げ、お客様にご満足いただける商品をお届けする覚悟でございます。と述べました。乾杯の発声の後、歓談に移りました。

中締めでは山本和男副理事長（山本工作所社長）が挨拶しました。事務局長からご指名いただきましたので、ご挨拶をさせていただきます。皆様におかれましても、本日はまだご予約があると思いますので、私からは簡単なご挨拶のみとさせていただきます。

各社、皆様のますますのご発展とご健康、ご安全を期して最後に乾杯にて終わりたいと思います。と述べました。



平成27年の賀詞交歓会には関係省庁や関係諸団体、会員各社、ドラム缶工業会関係者ら170名が参加、盛況のうちに終了しました。

ドラム缶工業会
常務理事 事務局長
本田 信裕



「テレビじゃ言えない健康話のウソ」

講師：中原 英臣 氏

ドラム缶工業会では、平成26年度・識者による講演会の企画として、テレビ・講演会などでわかりやすく医学の最新情報や健康について解説をされている新渡戸文化短期大学学長で医学博士である中原英臣先生に「テレビじゃ言えない健康話のウソ」と題して講演をしていただきました。

講演の概要は、

「健康は自分で守る、そのためには正しい情報を持っていること」また「20世紀は医者時代、21世紀は自己管理の時代」です。

そのためには生活環境と生活習慣の改善が必須であり、具体的には次の通りです。

- 日本一の長寿県は長野県、これは県をあげて健康増進活動（野菜を毎日350g食べる、など）に取り組んだ成果である。
- タバコは心筋梗塞の原因、酒は飲み過ぎに注意をして一週間に一回の休肝日を設けること。
- 骨は丈夫にはならないので、筋肉を鍛えること（一日50回の踏み台昇降、など）。
- 血液が濃くならないように寝る前と起床後にコップ一杯の水を飲むこと。
- 水、空気、食物の3つの安心が確保できることが重要、大都会ではこれらが担保されなくなっている。その他にも豊富な事例により、「正しい健康情報」についてわかりやすくご説明をいただきました。



質問に答える中原 英臣 氏



講演を聴きに集まった会員

◆ 講師プロフィール ◆

1945年東京生まれ。

1970年東京慈恵医大卒。

1977年から2年間、セントルイスのワシントン大学でバイオ研究に取り組む。遺伝子研究が専門。TBSテレビ「ブロードキャスター」にコメンテーターとして出演するなど、テレビなどでもおなじみ、わかりやすく医学最新情報や健康について解説。

山梨医科大学助教授を経て、山野美容芸術短期大学美容保健学科教授。（2010年3月まで）

2008年4月東京文化短期大学（現・新渡戸文化短期大学）学長就任。医学博士。

主な著作：『医者しか知らない危険な話』（共著、文藝春秋）、『お医者さんも知らない健康の知恵300』（光文社）、『上手な医者のかかり方』（集英社）ほか、著書多数。



新社長 登場

新邦工業株式会社

代表取締役社長 金子 賢三



鋼製ペール缶は1930年代にアメリカで開発され、1950年の朝鮮戦争の際、アメリカ在日駐留軍の補給物資の輸送や貯蔵用として日本に入ってきた。1952年、国内で初めてペール缶の製造に成功した新邦工業は相模原米軍調達部の指定納入業者となる。ペール缶は高級なイメージがあることから、国内でも大人気となった。日本の高度成長期を通してペール缶の生産量は拡大を続け、新邦工業は一貫して業界をリードしてきた。

1974年、新邦工業は千葉県香取郡大栄町に千葉工場を建設。創業以来60年以上にわたって企業理念である「使う人にとって本当に使いやすい容器を」目指し、時代のニーズに答えている。同社では昨年2014年8月、金子賢三氏が代表取締役に就任した。その新社長の横顔を紹介したい。

《 製造現場から営業最前線へ 》

金子氏は1948(昭和23)年4月2日、大阪生まれ。父親が転勤族であったことから大阪府内や名古屋、三重などに引っ越しを経験。大学は石川県金沢で過ごす。美術を専攻していたことから、日産系列の会社に就職し、車のデザイン部門に配属されている。「日本のものづくりが元気の時代でした。大学の同期も家電や建設関係などに多く就職しています。工業製品に個性が光っていました」と振り返る。デザインに没頭している時代に結婚し、子供が3人、孫6人に恵まれている。

1975(昭和50)年、縁あって新邦工業に移籍し、工場や資材などの現場の業務を18年経験した。「これは勉強になりました。品質管理などの部門も担当者もいないころです。お客様からクレームがあると営業と私が頭を下げに行く。そこで、お客様の要望を聞いて、製品を改善していくのです」と当時を振り返る。その後営業に配属され、現在も陣頭指揮をとっている。

《 現場の「人の力」を大切に 》

だいたい自社の歴史は見てきている。業界も熟知しているつもりだ。容器は、小さな過失が製品自体の商品性を台無しにしてしまう危険性がある。それだけに、業界をあげて品質には気を遣ってきた。とはいえ、各社が際立った設備を持っているわけではない。ほとんど同じレベルの設備で操業している。「突き詰めていくと『人』の問題なんです。人が差別化につながるのです。これを製造現場には繰り返し訴えています」と強調する。

現場での諸先輩からの指導は元より、お客様に怒られながら仕事を覚えてきた。書物などでも知見を広げている。おもしろいと思った本を参考にして社員に話すこともある。最近ではアメリカの原子力潜水艦の本を読んだ。「クルーが135人程度と、うちとほぼ一緒。彼らが一丸となって一番の潜水艦を目指す話です。そこで、我々もレベルアップしていこう、がんばろうと呼びかけました」と金子氏は微笑む。

《 長い目で新製品に取り組む 》

新製品の開発においては、大手化学メーカーに採用された業界初のパッキンがある。画期的な製品で、試作品を繰り返し数年かかって製品化に成功した。「担当者の方の理解と指導がなければとてもできませんでした。お客様の懐の深さに大変感謝しております」と語る。

新製品はお客様からの小さな不満をいかにとらえるかにかかっている。お客様は我慢しながら使っているかもしれない。営業はそれを見逃してはいけない。一緒に悩み考え、形にしていくことによって得られる信頼感と達成感は大きい。

産廃用の特殊な容器を開発したことがある。この容器を使ったシステムでお客様は特許をとった。今では会社の売上に大きく貢献している。

今後は「新製品開発や海外進出も含めて、長い目で戦略を練っていきたい」と考える。お客様の声に耳を傾け、「社是にある通り『誠意と熱意』をもって皆様の期待に応えていきます」と抱負を語った。

技術委員会 インド視察レポート

2014年12月にドラム缶工業会・技術委員会は、インドのドラム缶メーカー・口金メーカーの視察および2016年にムンバイで開催予定のAOSD国際会議の事前打合せを目的として、ミッションを派遣しました。その結果、完全自動のドラム缶製造を実現した工場を視察するなど、有益な情報を入手することができました。

その概要につきましてレポートします。

1. 視察スケジュール

12月 6日	成田からムンバイへ
12月 8日	アガルワル社のドラム缶工場 視察
12月 9日	バルマローリー・バンリア社の口金工場 視察 バルマローリー社のドラム缶工場 視察
12月10日	テクノクラフト社の口金工場 視察
12月11日	イーコン社のドラム缶工場 視察
12月12日	AOSD 国際会議の会場となるホテル 視察
12月13日～14日	ムンバイから成田へ

2. 視察メンバー

氏名	会社
縄田 康隆(団長)	日鉄住金ドラム(株)
加藤 安功	JFEコンテナ(株)
森林 幸三	(株)山本工作所
芹生 浩之	JFEコンテナ(株)
本田 信裕	工業会事務局

3. インドのドラム缶業界概要

新缶ドラムは年率6%で成長を続けている成長産業であり、小さな会社も含めて58社により、約10百万本/年を生産しています。アジアでは中国(100百万本/年)、日本(13百万本/年)に続いて3番目に大きな市場といえます。ただし、プラスチックドラムの需要も拡大を続けており、2013年は新缶ドラムと同数の生産本数に達しており鋼製ドラムと競合している状況です。

4. ドラム缶メーカー

◆ アガルワル社(プーネ市)

設備と設備の間は手作業が基本の古いタイプの工場ですが、アワーグラス式溶接機を導入するなど新規の設備投資も行っております。また、出荷時にドラム缶一本ごとに、バブルシートかストレッチフィルムを胴に人手で巻き付けて保護するなど、輸送傷には気を遣っているのが印象的でした。

◆ バルマローリー社(ムンバイ市近郊)

同社は国営でインドの各主要都市に7つの工場を持ちます。ムンバイ工場は訪問時から2か月前に稼働したばかりの最新鋭工場であり、設備はすべて欧州から導入した完全自動運転で、一本ごとの手作業は基本的にありません。このため、オペレーターはゼロでスタッフが15名、このスタッフがコイル切替や缶種切替などの段取り替え作業、監視作業、設備故障時の対応などを行っています。検査を除けば、多分、世界初の完全自動ドラム缶工場と思われます。

◆ イーコン社(ムンバイ市近郊)

2010年に稼働したインド初の連続ラインであり、バルマローリー社と同様に欧州製の設備を導入しています。また、独自設計で化成処理設備(リン酸鉄処理ライン)を導入しており、改善に関する意欲が高く、訪問時に品質向上に関する質問を多く受けました。

5. 口金メーカー

◆ バルマローリー・バンリア社(ムンバイ市近郊)

バルマローリー社とトライシューア社の50:50の合弁会社であり、プラスチックドラムと口金を製造しています。口金はインド国内で80~85%のシェアを持っており、80%を50カ国以上に輸出しています。技術および設備はオランダのトライシューア社から導入しています。



12月8日(月) アガルワル社
右から2人目がグプタ社長



12月9日(火) バルマローリー社
右から3人目がナンディ副社長



12月10日(水) テクノクラフト社養成学校での記念植樹



12月11日(木) イーコン社
左から3人目、4人目がサッカー共同経営者

◆ テクノクラフト社(ムンバイ市近郊)

口金事業だけでなく繊維事業、足場用鋼管事業も併せて経営しています。口金は単一の工場としては世界最大であり、世界各地に輸出していますが、同社社長は日本に輸出していないことを残念がっていました。製造設備、金型類は基本的に自社で開発し自社製作しているのが特徴的でした。

6. ドラム缶、口金の品質

ドラム缶メーカー、口金メーカーの視察を通して、その品質について特徴的なことをまとめます。

● ドラム缶の品質 ●

外観は塗料のタレ、ワキもなく比較的良好です。内面清浄度は需要家から鋼材を白い布で拭いて黒く汚れないことを求められているとのこと。このため、リン酸鉄処理の導入やDOS材の鋼材指定を行っていました。輸送傷対策は道路の路面が悪いこともあり、トラックは有蓋車で内面側の緩衝材にも配慮するなど気を遣っていました。

● 口金の品質 ●

口金の表面処理として6価クロムから3価クロムに切替済み

でした。フランジのネジ整形は転造方式であり、従来の切削方式に比べ、ネジ山が平滑になっています。落下試験時のフランジ緩み対策として、両社ともにガスケットやフランジ部を工夫した独自技術を開発済みでした。

7. 視察を終えて

インド視察前はドラム缶の最新の情報に巡り合えるとは期待していませんでしたが、現地で3つのドラム缶工場、2つの口金メーカーを訪問し技術討議を行うなかで、様々な最新情報を入手することができたため大変有意義な視察となりました。

また、2016年にムンバイ市で第9回AOSD国際会議が開催予定ですが、インドのドラム缶工業会の方々と意見交換を行い、さらに会場の候補となるホテルを視察したことにより、会議の成功を確信した次第です。

高度成長期の日本が生産設備を増強するなかで技術力を伸ばしたように、同様の経済成長期にあるインドの各社が、技術的にいろいろなチャレンジを試みていることが良く理解できました。我々もさらに技術の向上が必要であることを痛感しました。

平成26年 暦年出荷実績

平成26暦年出荷実績は、下の表に示す通りです。

200L缶は、前年比4.2%増の13,717千本と増加しました。

用途別では、石油向け（前年比4.7%増）、化学向け（同4.7%増）、食料品向け（同0.6%増）は増加し、塗料向け

（同2.9%減）、その他（同2.3%減）は減少しました。

ペール缶は微増の19,188千本増加となりました。

特殊缶は、亜鉛鉄板缶200L缶が前年比10.8%減少したものの、他は前年を上回りました。

（単位：千本）

缶種		用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年比 (%)
普通鋼薄板	200L缶 ()は前年比 下段は構成比		1,613 (104.7) 11.8%	11,116 (104.7) 81.0%	660 (97.1) 4.8%	177 (100.6) 1.3%	151 (97.7) 1.1%	13,717	104.2
	ペール缶 ()は前年比 下段は構成比		10,315 (99.7) 53.8%	7,701 (101.0) 40.1%	687 (94.3) 3.6%	0 - -	484 (100.0) 2.5%	19,188	100.0
	100L缶		0	101	5	0	7	113	101.2
	50L缶		0	84	0	0	5	89	98.8
	アス缶型		0	8	0	0	0	8	145.0
	その他容量缶		0	261	0	0	13	274	82.7
	合計		11,928	19,519	1,353	181	849	33,831	-
*前年比 (%)			103.4	104.1	96.9	101.2	98.0	103.5	-
*構成比 (%)			15.3	77.1	4.8	1.2	1.6	100.0	-
特殊缶	200L缶	亜鉛鉄板缶	0	42	1	4	12	59	89.2
		ステンレス缶	0	26	0	0	0	26	114.7
		小計	0	68	1	4	12	85	95.8
	200L以外	亜鉛鉄板缶	0	169	0	0	177	346	104.2
		ステンレス缶	0	11	0	0	0	11	107.6
		小計	0	180	0	0	177	357	104.3

（注）*前年比および*構成比は、トン数による。総本数は、33,830,545本。表上数値は四捨五入による差異がある。

会員		ドラム缶工業会
<p>《正会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 斎藤ドラム罐工業 (株) ● JFEコンテナ (株) ● (株) ジャパンペール ● 新邦工業 (株) ● ダイカン (株) ● (株) 東京ドラム罐製作所 ● 東邦シートフレーム (株) 	<p>《賛助会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● (株) 長尾製缶所 ● 日鉄住金ドラム (株) ● (株) 前田製作所 ● (株) 山本工作所 <p>《準会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 森島金属工業 (株) 	<p>〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階) TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969 e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp</p> <p>URL : http://www.jsda.gr.jp/</p> <p>ひびきNo.70 (平成27年2月10日発行) 発行人 ドラム缶工業会 常務理事 事務局長 本田 信裕</p>

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。